

江戸はなぜ 巨大都市として発展したか

まず、日本史を復習しておこう。江戸時代は1600年に徳川家康が関ヶ原の戦いで勝利を収め、徳川幕府によって日本が統治された1603年から、十五代将軍・慶喜が大政奉還し、戊辰戦争を経て1868年に明治時代が始まるまでの、265年間続いた。その間、江戸は世界でも有数の商業都市として繁栄したことはよく知られている。

では江戸は、巨大都市としてなぜそれほどまでに長期にわたり発展することができたのであろうか。各藩の大名を参勤交代によって定期的に江戸に住まわせて監視し、その移動に多額の財を消費させて謀叛を企てようとする大名の体力を削ぐなど、その要素はいくつか考えられようが、江戸が巨大商業都市として栄えたその最大の理由は、何よりも「水」の利用にあった。

誰もが知るように、江戸時代、税金である年貢は主に米で納められた。いわゆる年貢米である。大名はこの徴収した年貢米を品物に換える必要があったが、藩内の市場だけでは不可能なため、江戸や大

坂（現在の大阪）まで輸送して交換しなくてはならなかった。特に、幕府のあった江戸には大量の米が運び込まれた。その輸送手段として使われたのが、船だったのである。陸の交通機関が発達している現代ならいざ知らず、道路事情も悪い当時において、長距離輸送、しかも大量の米を運ぶためには、沿岸航路をたどって運航する大型船を用いるのが最適であった。そしてそれが可能であったのは、四方を海に囲まれた島国という事情が幸いしていた。こうして菱垣廻船や樽廻船といった廻船が、ひんばんに日本の周りを運航するようになった。

ひとつたび航路が開発されると、あとは全国各地のありとあらゆるものが、この航路を用いて次々と江戸の町にもたらされるようになった。特に、上方から下ってきた「下り物」は良質のものが多く、江戸で非常に好まれた。

水之都として
整備された江戸

全国から集められた米を始めたとする品物は、どうやって江戸の町中へと運ばれたのであろうか。江戸の海岸や河川

物流の歴史とその変遷

水之都・江戸の 物流事情



東京海洋大学 海洋工学部
流通情報工学科教授
苦瀬博仁氏



江戸時代の航路

江戸時代に入ると経済が活発になり、海運の航路が開発された。日本の全長は2,000kmをゆうに超える。江戸時代に2000万人まで増加した日本の人口を支えたもののひとつにこれらの航路があるのだ。
出典：帆船から学ぶ海と日本（大阪港振興協会）

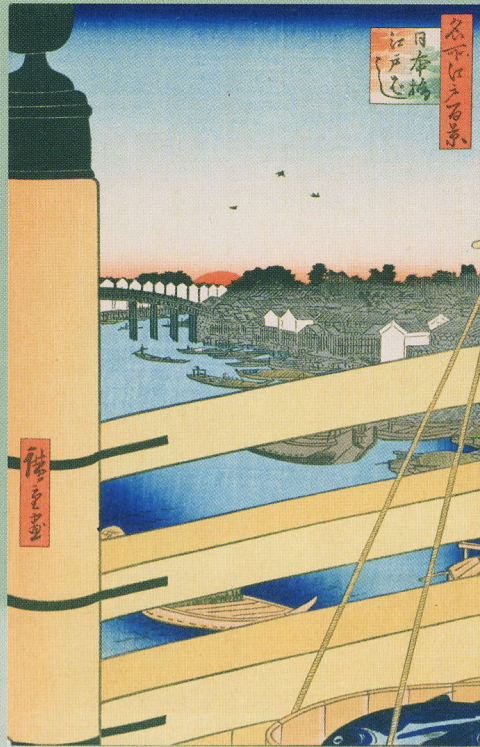


江戸初期の弁才船

日本橋江戸ばし

日本橋の欄干越しに江戸橋の方角を望んだ図。右下には盤台と初鰹が描かれ、初夏の風情が漂う。初物を好んだ江戸っ子は高値をものともせず、初鰹を手に入れるのに情熱を燃やしたという。擬宝珠は格式の高い橋にのみ付けられた。

出典：『江戸名所図会』



江戸時代の和船。写真は江戸時代初期の弁才船と呼ばれるもの。船体のほぼ中央に大きな帆を1本上げる。一本帆柱が基本的なスタイルで、帆柱や帆術に人が登る必要がなく、船上で操作できる。江戸時代前期以降、国内海運の主役として活躍した。有名な菱垣廻船や樽廻船は、弁才船の一種。出典：川口遊里図屏風、大阪歴史博物館所蔵

はそのために整備され、また新たに運河を掘削するなどの大工事が行われた。こうして江戸は「水の都」に変貌を遂げたのである。江戸の運河の利用は、すでに中世のころより行われてはいたが、江戸時代に入ると、それを都市計画のなかに取り入れて、どんどんと拡大していった。現在では、運河の多くは暗渠として地下を流れるか、もしくは埋め立てられて道路と化してしまつて気がつかないが、明治のころまでの東京には、まだまだ江戸のなごりとして、あちこちに複雑に入り組んだ水路が多く残っていた。

さて、江戸湊へと運ばれた物資は、大型船から高瀬舟等に積み替えられ、いま述べた運河を通つてさらに江戸の町中にある河岸や物揚場（または揚場）へと運び込まれた。河岸というのは、現在も魚河岸などにその名を留めているが、本来は川の岸辺にある船荷の揚げ降ろしをする場所のことを指している。この河岸は町人用で、武士用は物揚場と名称が異なっていた。一方、高瀬舟の方は明治の文豪・森鷗外の名作で知られているが、舟底が平らで、荷物を積んだまま浅い川でも楽に航行することができるとのことである。

江戸の町にもたらされた米やその他の品物は用途に応じて扱ふ河岸も異なれば、保管場所も決まっていた。なかにはその名残をいまでも地名に残している場所もある。以前国技館のあった「蔵前」は、浅草に米蔵があつてその前という意味であつたし、「木場」は言うまでもなく、材木の集積所があつたところである。

また、日本橋には先ほど例に挙げた魚河岸があつた。加工品は別としても生鮮食品などは、長く保存しておくことができないため、そうした河岸は、やがてその場で品物を販売する市場へと発展していくことになる。

家康が江戸に拠点を定めた理由

家康による江戸の町の作り替えについては、まだまだ分からないことが多い。そもそも関ヶ原以前、家康が江戸に拠点を定めるにあたっては、小田原攻めに功労のあつた家康に豊臣秀吉が江戸を与えたが、秀吉の腹には未だ開けていなかつた江戸に家康を追いやる意図があつたのではないかとこの有るが、これまでの有力な説であつた。しかし、実は家康が拠点を定めるに際し

て、江戸の地の利を充分考慮し、あえてこの場所を選んだのではないかと近年こうした説が学者の間で唱えられるようになってきた。物流を研究している東京海洋大学物流システム研究室の苦瀬博仁教授もこの説を支持する一人だ。

「家康は江戸に町を作るときに、物流の仕組みを考えていたんだと思うんです」と苦瀬氏は言う。「戦略ストラテジー・戦術（タクティクス）・兵站（ロジスティクス）は三大軍事用語ですが、戦国武将であつた家康は、当然この3つに長けていたはずなんです。このうち兵站は、現在の言葉で言うならロジスティクス、すなわち物流システムを指しています。当然、家康は物資供給について思いを巡らしていたと考えています。利根川を銚子から太平洋に注ぐように作り変えて洪水を防ぐとともに、江戸川から江戸よりだけでなくこの地域全体を肥沃な台地にするのだ、と統治の作戦を立てたんじゃないでしょうか。インフラ整備と称してね」

物をいかに効率よく移動させる、そして流通させることができるか、それが都市を活性化させるための生命線であることを、江戸の町はわれわれによく教えてくれる。

参考文献：川名登『河岸』（法政大学出版局）、鈴木理生『江戸はこうして造られた』（ちくま学芸文庫）、同『江戸の川・東京の川』（井上書院）他